

令和 8 年 8 月 4 日(火)付

県内就職率 目標上回る

今春卒 島根大と県立大で37%

島大教育学部が押し上げ

年度末に卒業した学生の県内就職率が37・0%で、目標値を0・2%上回ったと報告した。島根大教育学部生の教員採用が進み、全体を押し上げた。

県内就職率は2年連続で上昇し、県内就職者数は456人。出身別では県内が12人増の346人、県外が9人増の110人だった。

島根大の県内就職率は24年度比3・9%増の31・5%だった。学部別では教育学部が最高で、12・9%増の50・8%となった。県教委が採用予定者を増やし、1992年度以降、過去最多の400人の合格者を出した2025年度実施の教員採用を経て、教員に就いた人が大幅に増えたという。地元の高校生に就職の魅力を伝える高大連携で教員志望者も増えたとみる。

島根県内の若者定着に取り組む「しまね産学官人材育成コンソーシアム」が3日、松江市内で運営協議会を開き、島根大と県立大(短期大学部含む)を2025

年度末の県内就職率は1・2%減の45・1%。県内出身者が減った世代だったが、企業や住民と連携した

研究活動により地域の魅力が伝わったことが奏功したという。

コンソーシアムは県や県教育委員会、島根大、県立大、経済団体などで構成。

24年度の県内就職率は目標39・4%に対して実績は35・1%にとどまり、目標と差があるため25年度の目標を36・8%に下方修正していた。松江工業高等専門学校は24年度末で脱退した。

大谷浩共同代表(島根大

学長)は「県外出身者が島根県内で就職する動きも定着しつつある。学生に地元企業の魅力を一層伝える必要がある」と強調した。

7月に文部科学省から採択を受けた事業で、理系人材確保に向けた委員会の設置を決定。将来的に県内で活躍する理系人材の育成に取り組む。

鳥取県(鳥取大、鳥取環境大、鳥取看護大、鳥取短期大、米子高専)の24年度末の県内就職率は28・2%となっている。

(岸本久瑠人)

字が覚えられない子どもどう指導？

文字を何度も練習しているのに覚えられない、同じ間違いを繰り返す。そんな子どもを、どのように指導すれば良いかを考える教員向け研修会が7月下旬、松江市内であった。講師を務めた島根県立大人間文化学部の内山仁志教授、島根県LD（学習障害）支援アドバイザーが「繰り返し練習を求めていることが、子どもの『学び』につながるとは限らない」と訴えた。

（増田枝里子）

参加者は事前に架空の国 修会に臨んだ。漢字の「林」語テストの答案を採点し研 にある縦線2本の下を、ど



漢字が覚えにくい子について「練習不足」で片付けるのではなく、『どの段階で学びが停滞しているのかを見立てることの重要性を唱える内山仁志教授』松江市乃白町、市保健福祉総合センター

島根県大
内山教授

「想起」を鍛える工夫を

こちらも「はね」ていた場合や、反対に「水」「力」の「はね」の部分をはねていない答案をどう見るか。字形の崩れや止め、はねを厳格に評価し、正確な再現を重視すれば得点は下がり、部分点（△）の活用や

「意味が通じれば可」とすれば高得点になった。採点者次第で得点は大きく変動し、内山教授は「得点は『結果』であり、背景に何があるのかを知らなければいけない」とした。

文字を書く行為には、読む（字を見て音を思い出す）▽意味を理解する▽文脈に合わせて適切な漢字を選ぶ▽写す（手本を見ながら正確に形を再現する）▽想起（手本なしで必要な形を思い出す）▽実際に書くの6要素があるという。

内山教授は思うように書けない背景には、6要素のうちどこかが停滞してい

ると説明。誤答の傾向や練習ノートの筆跡などから、つまり箇所ごとの仮説を立て、教材作りに生かすことが大切だと訴えた。

練習時に文字を「写す」行為が作業化している場合が多いとも指摘。テストで試される「想起」「文脈判断」といった能力と、それが生じていると問題視した。

漢字全体を書かせるのではなく「部首のみ」「1、2画目のみ」を示し残りを書かせる、字をパズルのようにして正しい形に組み立てる力を見るなど、練習時から「想起」を鍛える工夫が必要とした。

内山教授は「漢字練習の目的は書く回数をこなすことではなく、脳から情報を取り出す回数を増やすことだ」と説明。特定の子どもの向けの工夫が、結果的にクラス全員の学びやすさにもつながると呼びかけ、子どもの「学び方」を見極めた上で、教材作りに取り組むよう求めた。